

# 久米正雄撮影フィルム修復事業

## 久米正雄が捉えた文豪たちの知られざる素顔

### 久米正雄撮影フィルム修復事業

郡山市では公立大学法人横浜市立大学と協定を締結し、久米正雄が撮影した映像フィルムの修復事業を進めてきました。令和7（2025）年に全ての修復作業が完了しましたので、その内容を紹介します。



### 久米正雄(明治24(1891)年～昭和27(1952)年)

長野県上田に生まれ。父の死後、母の実家である安積郡桑野村（現・郡山市）に移住した久米は、開成小、金透小、安積中学校（現安積高校）に学ぶ。推薦で第一高等学校（現東京大学）入学後は、同期の芥川龍之介や菊池寛らと第三・四次「新思潮」を刊行し、後に夏目漱石門下となる。

### 現代日本文学巡礼フィルム

大正の終わり頃、改造社（社長・山本実彦）は既成作家の代表作を編集した「現代日本文学全集」を出版し、そのPRとして「現代日本文学巡礼」と呼ばれる映画を撮影した。

映画監督を務めたのは、当時自分で35ミリの手回し撮影機を購入し撮影するほど凝っていた久米正雄であった。



改造社社員の水島治男（左）が社長である山本実彦（右）の元を訪ねている。



久米正雄（右から2番目）の自宅と家族を映した映像



芥川龍之介と2人の子どもたち。芥川はこの2か月後に自殺する。



代表作「田園の憂鬱」で文壇の注目を集めた佐藤春夫（左）と妻子。撮影した年に建てた新居で撮影された。



雑誌「文藝春秋」を創刊した菊池寛（右から2番目）。旧有島武二郎の文藝春秋社で撮影された。



撮影時に既に他界している文人たち（画像は国木田独歩）の墓参りをしている。



久米正雄が撮影機を構えている様子。

### 久米家所蔵フィルム

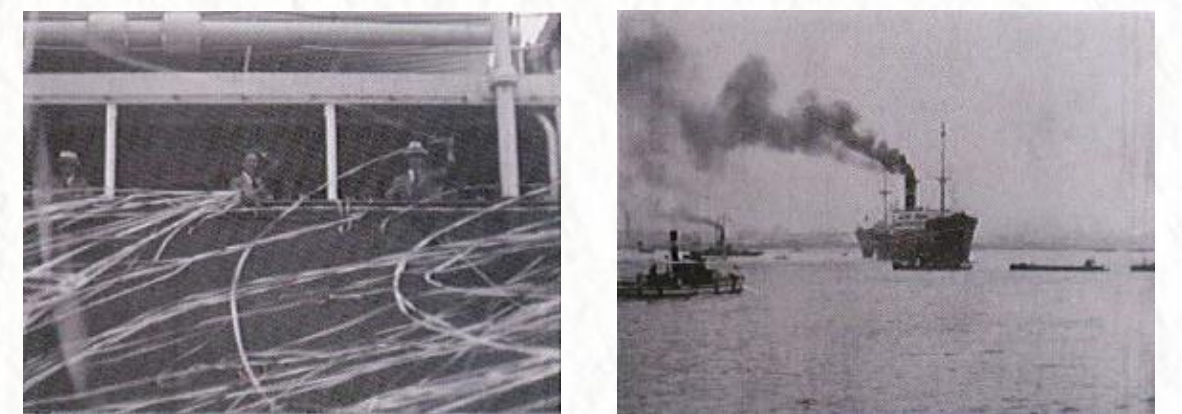
久米正雄が撮影に関わり、久米家に残されたフィルムは「現代日本文学巡礼」の他にも存在する。1つは「大正十三年頃のプライベートフィルム」とされるもの、もう1つは「玉川撮影記」として記述が残るものである。

郡山市では、これらのフィルム12本を取得し、令和元年度からフィルムの修復・デジタル化を進めてきた。

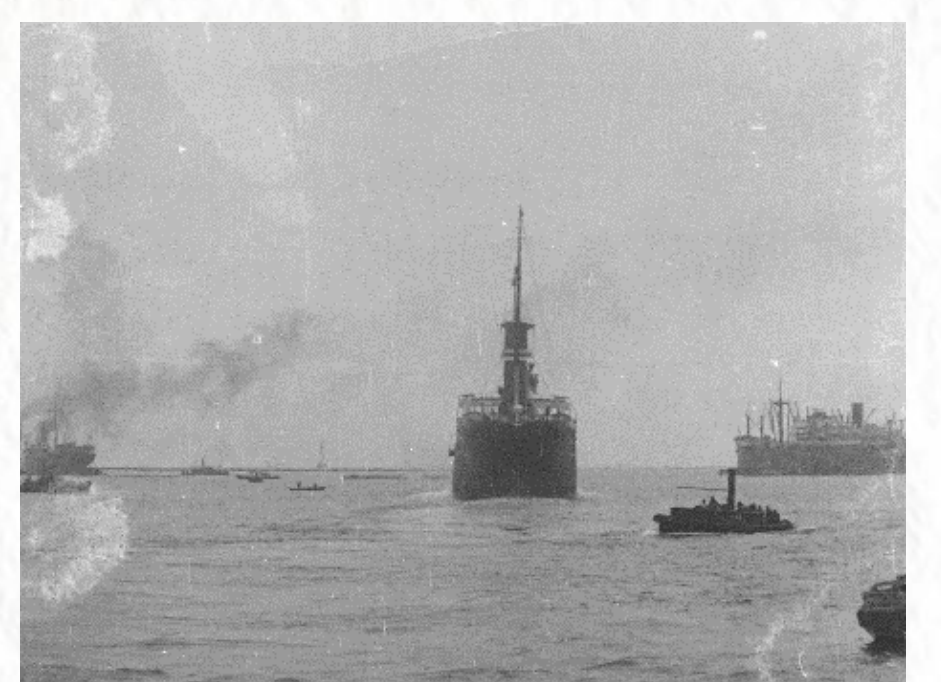
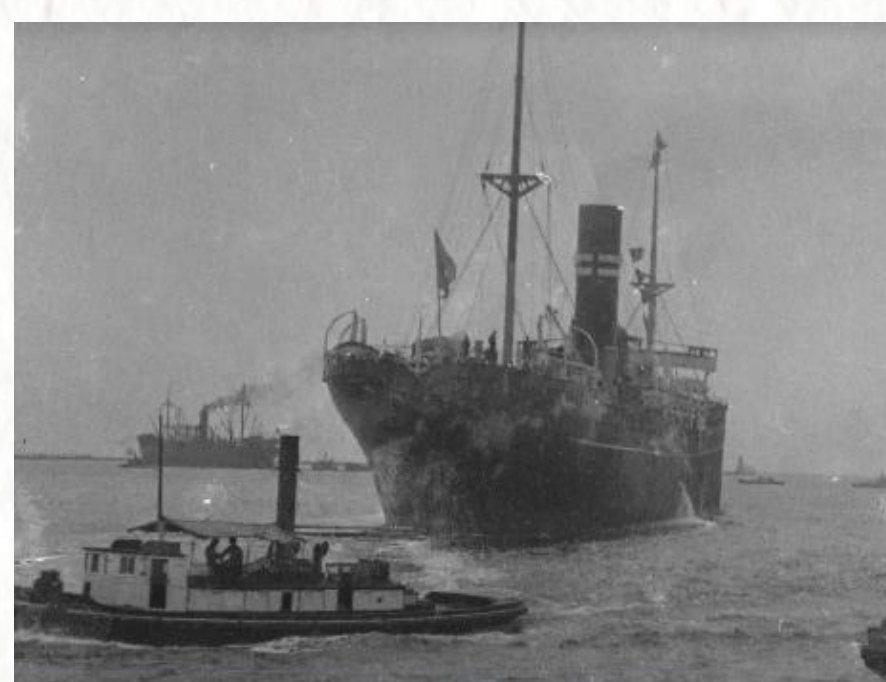
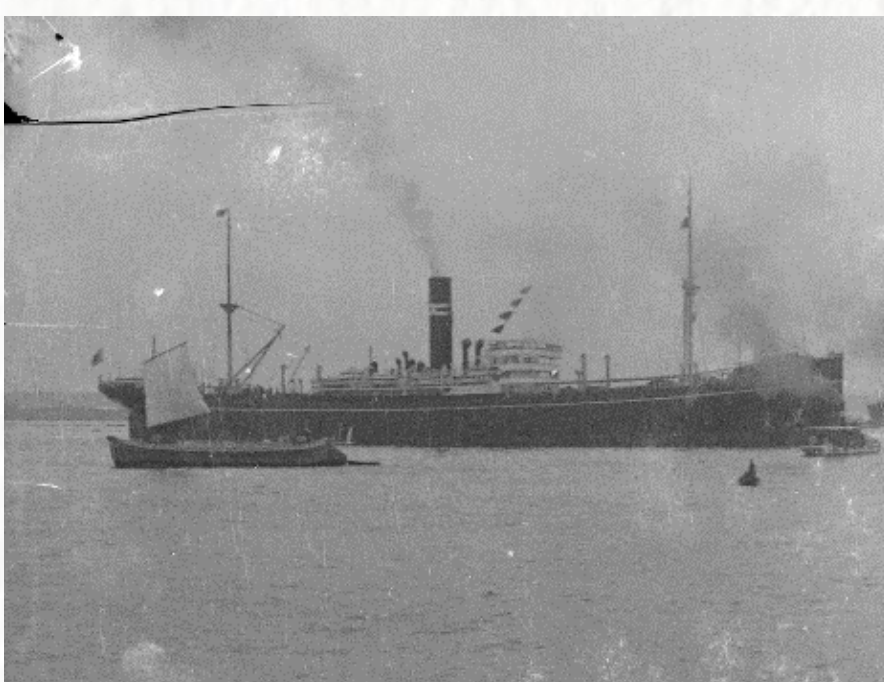
#### 《大正十三年頃のプライベートフィルム》

撮影日時など詳細が不明な映像で、久米正雄の息子、昭二のメモに「道楽フィルム 父親がまわしたもの 1924年頃のプライベートのフィルム」と記されたものが残されている。

久米正雄の著した「鎌倉生活の一日」によると、久米の兄・哲夫が洋行する際の映像であることがわかる。



以前に映像が確認されていたフィルム。横浜埠頭にて船を岸壁から見送る様子が映し出されている。



令和7（2025）年度に修復したフィルム（No.6）の映像。すでに「こおりやま文学の森資料館」に収蔵されている、東京駅から横浜埠頭まで皆で見送り出航する船を見送るフィルムと同日のものと思われる。行き交う船が映り、当時の港の様子が鮮明にわかる。

昭二が残したメモには「兄の洋行 東京駅→横浜埠頭」「劇」「多マ川の鮎」「芥川、菊地、左団治、松蔦他」という記述が残っている。

修復したフィルム映像には、多摩川で川遊びをした様子と、芥川や菊池が登場するシーンが収録されている。



令和4（2022）年度に修復したフィルム（No.7）の映像。川遊びを記録したフィルムであり、投網をする様子や船に乗り込んだ後の船内の様子が撮影されている。



フィルムNo.7の後半部には芥川龍之介、菊池寛などの人物が確認される。料亭のようなところで水菓子を食したり、庭に出て東屋のようなところで談笑する姿が撮影されている。

### 《玉川撮影記》

久米が撮影したものの中で、「現代日本文学巡礼」とともに撮影時の詳細な記録が残るものに「玉川撮影記」がある。大正13（1924）年4月24日、作家たちが随筆社の主催で玉川遊びに参加し、二子玉川の亀屋へ遊行した際のものである。

一行は、渋谷に集合し玉川電車で二子玉川へ向かった。参加者は、田山花袋、吉井勇、宇野浩二、葛西善蔵、中戸川吉二、久保田万太郎、加能作次郎、佐佐木茂索、近松秋江、水守亀之介、里見弴、中村武羅夫、久米正雄、田中純らであった。

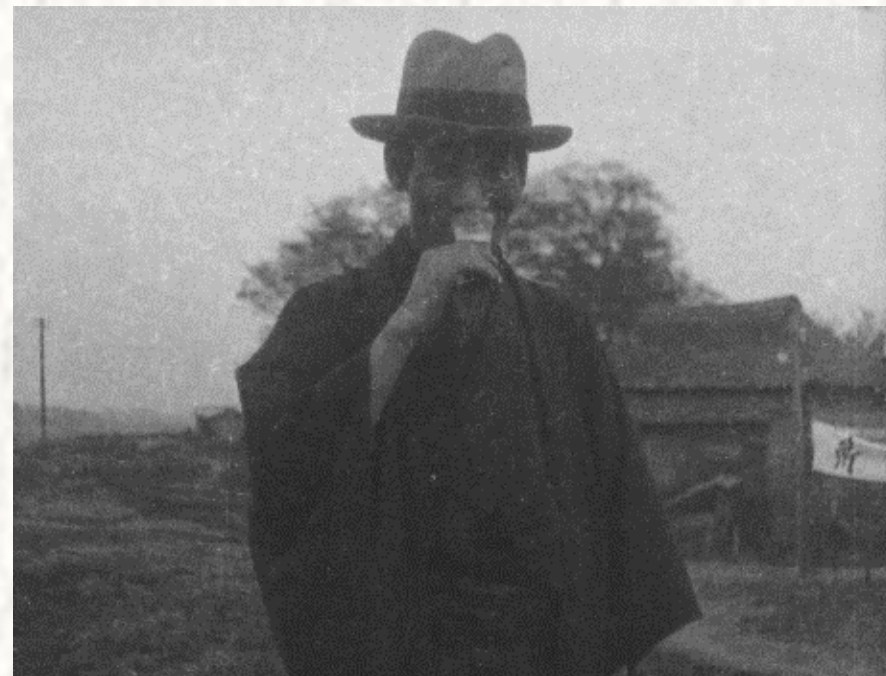
今回修復されたフィルムにはこれらの作家が映っており、これほどの人物たちが一度に映像で確認されることははじめてである。



令和5（2023）年度に修復したフィルム（No.1）の映像。映像のはじめは、船から岸にあがってすぐに撮影されており、これは久米正雄の随筆の記述にもある。また、フィルム後半に残されている玉川遊行参加者が歩いてカメラに向かって歩いてくる映像は写真としても残っていないものである。



文芸評論家や作家として活躍した田中純（フィルムNo.3）



「苦の世界」で新進作家として有名になった宇野浩二（フィルムNo.3）



芥川龍之介や菊池寛らと第三・四次「新思潮」を発売し、劇作家や小説家として活躍した久米正雄（フィルムNo.2）



新しい文学を試み、日本における自然主義を確立させた田山花袋（フィルムNo.2）



志賀直哉や武者小路実篤らと文芸雑誌「白樺」を創刊したことでも知られる里見弴と2人の子ども（フィルムNo.3）



小説家、編集者として活躍し、文藝春秋社で芥川賞・直木賞の創設に尽力した佐佐木茂索（左）と漫画漫文スタイルを確立し、芸術家、岡本太郎の父でもある岡本一平（右）（フィルムNo.3）



小説家や翻訳家として活躍し、田山花袋に師事した加能作次郎（左）と広津和郎らと同人雑誌「奇蹟」を創刊した葛西善蔵（右）（フィルムNo.2）



田山花袋、里見弴、里見の子どもら（フィルムNo.2）



下村千秋らと同人誌「十三人」を創刊した牧野信一（左）と純文学だけでなく、少女小説や風俗小説、童話など多岐にわたって文筆活動をした水守亀之助（フィルムNo.3）



石川啄木らと雑誌「スバル」を刊行した吉井勇（左）、小説家、劇作家、演出家、俳人として活躍し、日本演劇協会会長を務めるなどして、文化勲章を受章した久保田万太郎（中央）、里見弴に師事し、牧野信一らと雑誌「随筆」を創刊した中戸川吉二（右）（フィルムNo.3）

田中が、助手をやって呉れるから、撮影を開始しよう云ふ段になつて、皆と一緒に亀屋を出て、磯土手へ出る。野道が川添ひに續いてゐる。所々の電柱が氣になるが、それが却つて中心になるやうな所でもあつて、謂はゞ鳥渡大陸的なロケーションだ。土手に立つたり、腰を下ろしたりしてゐる皆を、パノラマで廻し撮る。少し夕景で、顔は暗いが、背景から輪廓だけに抜けるだらうと思つて、皆の大寫を一人二人三人づゝ収める。

（略）

全部で、三百五十呎ほど撮つた・十五六呎は機械の中でこけて損をした。

歸つてから、酒席の事は、外に書く人があつたらう。

フィルムは、僕の無精で、まだ出来ない。出来たら、此の文壇のオール・スター・キャスト、玉川遊行全一巻は、改めて何處かで封切しよう。

久米正雄「玉川撮影記」「随筆」第二巻第五号より

復元されたフィルムの1つ目は多摩川で川遊びの様態を撮ったもの、2つ目は洋行する兄を横浜で見送った時のもの、そしてもう1つが雑誌「随筆」（編集兼発行人 牧野信一）の特集「玉川遊記」のために作家たちが大正13（1924）年4月24日に玉川へ赴いた時のものである。すでに大御所となっていた田山花袋をはじめ近松秋江、里見弴、加能作次郎、岡本一平、佐佐木茂索、久米正雄、田中純、宇野浩二、中村武羅夫、吉井勇、葛西善蔵、久保田万太郎、水守亀之助、中戸川吉二、牧野信一、そして随筆社同人たちが集っている。作家たちが映像として残っていること自体が貴重であるのはもちろんだが、それぞれの作風やそれまでの関係性を超えて「玉川遊記」という場を共有し、親密な交流をしていたことが映し出されていることにも驚きを禁じ得ない。「随筆」編集部は既にある文学的実績を前提として、その多様性を認めながら交流の場を意図的に創出した。このような文芸ジャーナリズムと作家との循環的構図が見えるといった意味でもこのフィルムは大変貴重な資料だといえよう。

## 🎬 フィルム修復事業年表



郡山市が久米正雄のご遺族から久米が撮影したとされるフィルム18本を購入（うち6本は久米正雄の息子の昭二氏が焼き直した映像であり、文学資料館にて公開されている）

1998年  
(平成10年)



- 4月 郡山市と横浜市立大学が協定締結
- 10月 フィルムの状態や修復可否のための修復可能性調査を実施
- 11月 修復可能性調査の結果を基に試験的にフィルム2本（No.2、No.9）を修復するパイロット調査を実施

2019年  
(令和元年)

2020年  
(令和2年)



9月 本調査開始  
フィルムNo.7を修復

2021年  
(令和3年)

2022年  
(令和4年)



- 8月 未修復フィルム8本の詳細な修復可能性調査を実施
- 9月 外側が固着したフィルムNo.4を試験的にデジタル化

2024年  
(令和6年)

2025年  
(令和7年)

- 9月 こおりやま文学の森資料館で「現代日本文学巡礼」をテーマとした特別企画展「蘇る文豪たち」開催
- 11月 横浜市立大学 庄司教授からフィルムの修復の提案 関係各所と協議しフィルム修復の検討を開始



- 5月 パイロット調査及び修復映像の結果を一般公開  
全国各地で注目を浴びる  
(はじめて映像で田山花袋が確認された)

- 11月 フィルムNo.1を修復



- 6月 未修復フィルム7本のデジタル化及び映像修復を実施
- 8月 全てのフィルム修復完了
- 10月 フィルム修復結果の報告会開催（郡山市）
- 11月 フィルム修復結果の報告会開催（横浜市立大学）